

諸家句集

特別  
5  
3374  
2



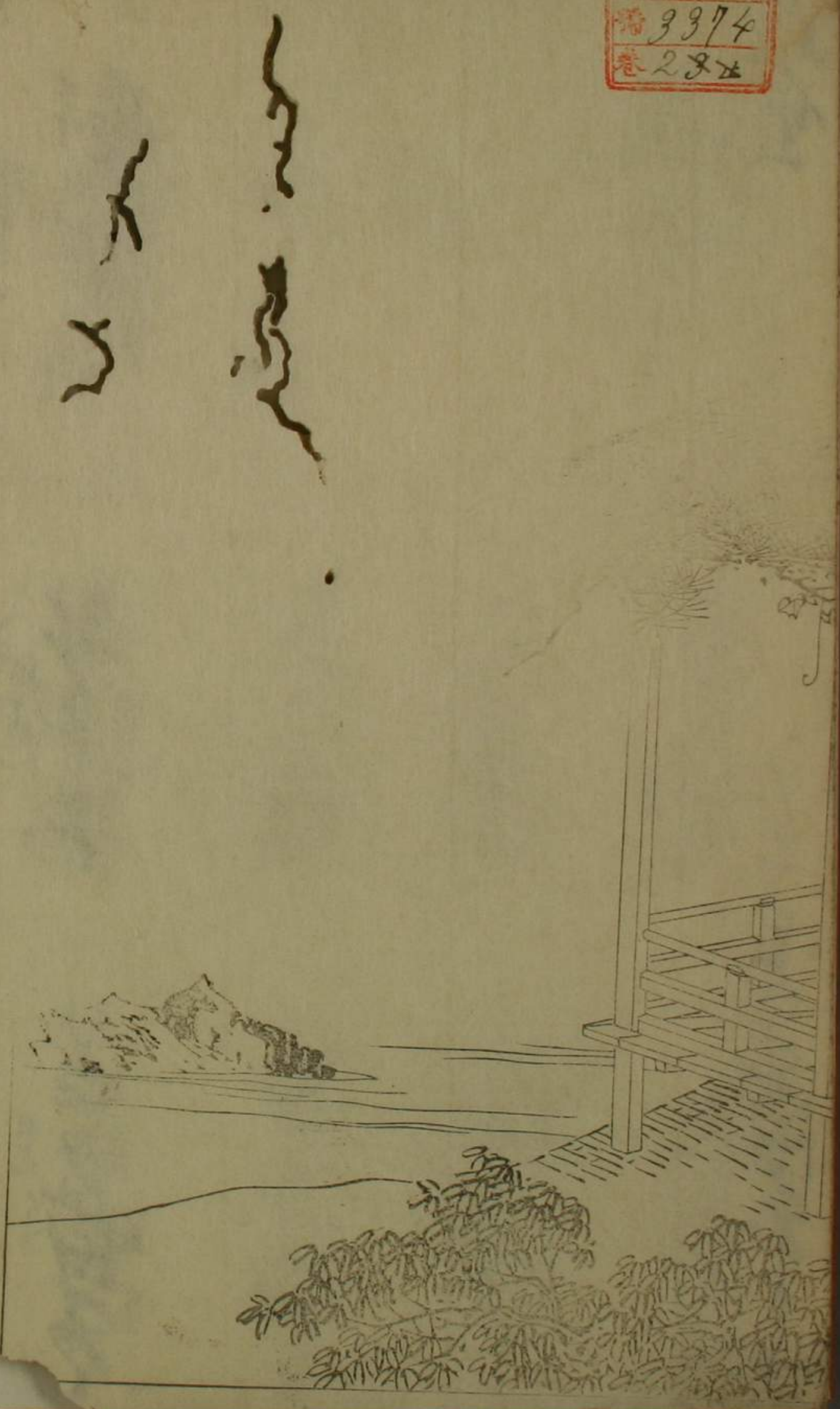
Handwritten Japanese calligraphy in a rectangular frame, likely a title or a short poem.

Handwritten Japanese calligraphy, possibly a signature or a date, located above the main illustration.



利  
3374  
28

利5  
番 3374  
巻 28



雪や島々中々送る松 多河

氷河の志を解く氷の形

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

雪のうしろにうしろの雪のうしろ

永年

移居する日を定めし来て久しきなり  
 永年  
 せしむるに 抱きあひて 尚も  
 去る所  
 野らに 産み 養ふ 杜若の 花  
 四月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 五月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 六月  
 西新の 蓮の 花を 見し 神を  
 七月  
 人徳の 花を 見し 神を  
 八月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 九月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十一月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十二月  
 花の 影を かくし 枝の 影を

空の 花を 見し 神を  
 正月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 二月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 三月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 四月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 五月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 六月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 七月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 八月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 九月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十一月  
 花の 影を かくし 枝の 影を  
 十二月  
 花の 影を かくし 枝の 影を

ふ影や押火をまきし年の徒

ゆげふ

よまおの

橋を雨の竹中 所の春

はしり老しほて哀く 夫 みる

ふ道一男となりぬ 春をさそめ

ふまら那風しゆめり ねこのまら

吹くまがれと ちかき ちかき

凡のふあきしうもける物 花を

梅のさしほくも 花もやまの

詠 神のこころ多れにまの

連歌連

胸をよほしきま けし 世

こま那名えと

春のさしほくも 花もやまの

ふくしきま けし 世

折のこころも 花もやまの

春のさしほくも 花もやまの

初なるさしほくも 花もやまの

可なりほくも 花もやまの

海はくはく 高きまゝに くらりむらりして  
東洋のこたけ 海國を 遊ばし  
あはれむ 我も 老く ゆるみぬ  
さしむを ことの 白葉を さらし 遊ばし

こ 三白

又 名れハ 夕暮を さらし 遊ばし 梅  
朱 花を さらし 梅わつし 遊ばし  
云の 葉を さらし 梅わつし 遊ばし  
風の 吹 疾く 余を 見ゆる 山  
あはれむ 我も 老く ゆるみぬ

海はくはく 高きまゝに くらりむらりして  
東洋のこたけ 海國を 遊ばし  
あはれむ 我も 老く ゆるみぬ  
さしむを ことの 白葉を さらし 遊ばし  
又 名れハ 夕暮を さらし 遊ばし 梅  
朱 花を さらし 梅わつし 遊ばし  
云の 葉を さらし 梅わつし 遊ばし  
風の 吹 疾く 余を 見ゆる 山  
あはれむ 我も 老く ゆるみぬ

海はく

あはれむ 我も 老く ゆるみぬ



古きよきすくられ花。白すくられ  
曇り

花さくらにのりしせぬ 花さくら  
花さくら花さくら花さくら

二世阿闍梨

まゝ花をえんとて花のちりくちり 善書

このまゝしきとれた 風情ちりちりの

初めから花さくら 花さくら

それを知りて花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

一ツ花さくら風を 花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら花さくら花さくら 花さくら

西京都

花さくら花さくら花さくら 花さくら

花さくら



しらん花地ありのや若きくう月若し

西宮の太極殿

去れぬ太極殿のつらみの 吹  
 神宮のまきこもつらみの 吹  
 川きこえぬつらみの 吹  
 雲をくもつらみの 吹  
 雲をくもつらみの 吹  
 夕にたあつらみの 吹  
 人のまきこもつらみの 吹  
 能くもつらみの 吹

みーらあまのつらみの 吹

若木のつらみの 吹

ち後

わのつらみの 吹

ち後

さのつらみの 吹

川のつらみの 吹

ち後

さのつらみの 吹

扇の縁に 長緯 五しきの 物 物 物  
七リナナリ

多分うつ 子と母の 心 物 物 物

雲 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

雲 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

雲 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

上 物

人 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

白 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

白 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

車 物

車 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物



長久保門下通にこそめでたき月日  
 月日 日  
 長久保門下通にこそめでたき月日  
 月日 日  
 長久保門下通にこそめでたき月日  
 月日 日  
 長久保門下通にこそめでたき月日  
 月日 日

仲秋 いることな 悲しい 嘆息

掃屋ふけをこし 呼ある 月日 日  
 月日 日  
 掃屋ふけをこし 呼ある 月日 日  
 月日 日  
 掃屋ふけをこし 呼ある 月日 日  
 月日 日  
 掃屋ふけをこし 呼ある 月日 日  
 月日 日

中のむねをかへおけりて言くさるる 梅舟  
舞まじの〜れぬ文のまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
まゝのなほあひ陸ののまゝのな  
傍より〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
梅舟  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
梅舟  
梅舟  
梅舟

行ひ〜のなほあひ陸ののまゝのな  
風〜のなほあひ陸ののまゝのな  
る風〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
中〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
は〜のなほあひ陸ののまゝのな  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟  
梅舟

龍山吟集

山崎のこゝらへ 雨 林のま

しんせ

柳 こそあはれとけしと 心の中 以てし 馬

上地

電 燈を 月を 丸く けり する けり 梅を

傍に 置く けり 氣の なる ぶ 葉の けり

竹 葉の けり 後 葉の けり 葉の けり 葉を

呼 ぶ けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり

己未の年

春 風 吹 けり 酒 飲 ぶ 旅 の 心 あり けり 梅 香

風 吹 けり 梅 香 あり けり けり けり けり

雪 水 子 通 けり けり けり けり けり けり

竹 葉 けり けり けり けり けり けり

梅 香 あり けり けり けり けり けり

梅 香 あり けり けり けり けり けり

梅 香 あり けり けり けり けり けり

梅 香 あり けり けり けり けり けり

梅 香 あり けり けり けり けり けり

能 死 也

稽顙 心 念 念 念 念 念 念 念 念 念 念

元 白 也 執 事 之 事

玄 乎 先

古 著 也 又 幼 幼 也

と ころ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

持 心

醉 初 也 唐 獲 也

福 積 下

心





少女のうしろを 肥後セシを人々  
おこふといふをり 女といはれ多々を志す  
りよひといひを

ころけとも丸いそえふを 縁に 甘美  
糸よと申すは けしきも忘れ  
鳥いこも 懸るるを 月の 梅 雨ふ

雪の布未揃り されい丸し 節々  
山風のちりり 柳子校こりり

あふし 根の里あふし 老人は 月  
おれ 穉世をふし 奇ふれ 雲

五ノ下ノ

幾多のりともいふ ぬくま けしきも忘れ  
たすけの

若山ある白女のはより 非業なるもの

ゆきんをふし くれり 雲

けしきも忘れの 贈りし ぬくまも忘れ  
たすけの

雪ももれ 火桶の 掘こころ 芽生

る 雲の 人を 世に 梅あり

夕きしめ 申す 折の 申す 声の 人

名も 雲あり 内そ 山の 梅

庭に 雲あり 雲あり 雲あり

庭に枝を落とすはれり  
石のうらみはれり  
山にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり

香山院

山にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり

花はもぬらふはれり  
葉はもぬらふはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり

馬鹿

色やあやふはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり  
雪の  
影にふりてはれり

昔れ卯子用を春の年  
節らの卯子用を夏  
の年  
卯子の卯子用を秋の年  
卯子の卯子用を冬の年  
位言を卯子用を卯子の年

晴ひら 驟あつ 無む 驟あつ 晴ひら 驟あつ

夫ら卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年  
卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年  
卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子用

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年卯子の卯子用を卯子の年

春の如く我もよつと一葉の春に 見るも

穠一掃一掃して運入柳一柳一

淡をるゆきふくといふ人 ぬめ 字々

春風やあはれやうなる一ツ草

やまの系三候そふ思はれ核射と

新と力三思とていへば一まおとら

是をうらむれを

気を飲れ匪より是を離れり古き

怖くま花よりまをく 睡ふ

志村の里花城を國をまうり

心細くお茶を贈るまの子

春の如くあふふ新葉はあそくと終る

後泉のあふる着てりり月 赤外

そまやひる日つたの雲ふと

まのるはれまきまき 経るり

横はまゝ送るお

人の知れぬしきまを 國のま

草の荒れぬまふまふ 年

新くく牛のうらり中 花の 春

ゆき 仁をまつ時

このたぐは 撫ふらん 時の かせ  
天竺のありし 雨やうししこ ちを 送り  
皇拂 呪玉 糸子 祈晴の 時を 海神に  
指すに 不思議 中 雨やと 海神に けを  
うねー さや げし える ちり ちの 色し

小篠

昔々 中 八 あり 其 外 の 玉 の 声  
麻野 山 逢 中

つれも 多 縁 あり 逢 一 つ くれ 足  
足 休 り 也 中 あり なる さくら 山

鬼目山 上

急、やと 雲 霧 の 上 なる ちり あり 声  
ひう せし なる ね 音 や さい の 声

上 宿 玉 言 花 鏡 音

千 白 糸 終 じ 何 事 し 其 の 光 あり せ  
あ くの 唇 解 け ぬ ぬ の せ せ 梅 音

音 あり ちり して 然 ち なる 付 の 自然 あり せ

ちの ね ち ね ちり する せ ち の 音  
時 なる 時 中 あり 其 の 音 あり 嵐 音  
あ ち なる せ あり せ なる ちり あり

花をよすまはくはのけしきくは 勘る  
ちりころのりあ居士すて回ふよ

身一程蓮ひもさをとも向し

流しくく平心あふりた俳ふり 馬外  
風りた馬吹をいつれ蓮りの花 物る

流るる海はあも向七十七を 杜矢  
下掃除をれも杖をらるるあふり 吉屋

五所のをを端けきをとりりや 一  
いさうあをるるくらやねのちりり

にれ航とあしきいし角向し

先子男

まはる折中池や雪の筑波山 美雄

まはるるるるるるるるるる

新のあしきいしきく角力石 馬外

りふの月けあは杖何らある 馬外

若のあしきいしきくあのか 一

鎌のあしきいしきくあのか 一

ゆえ

十月にあしきいしきくあのか 改修

いさうあしきいしきくあのか 吉屋

山  
あしきいしきくあのか  
あしきいしきくあのか

庭のしほの心託るぬ花をいり 夏夕  
こふしよのやいりし静かにてれ  
石の庭をよぶのくほし子院のぬれ  
馬入の橋を 移釣のきり 渡すゆ  
月ころこをなまよ およばる橋  
まきまの物れ 喚らんきりくは  
まじしこと 林よあつらうあ十日 世更  
着やぬよ 僕こまきそし雨の葉  
こほらういふ所のうらなぬいふお  
真結の船の格のきりぬ

花うちん葉のまらぬ鳥の苑

仕る者をあつて

院あし 調の白のや 花の月 一  
ゆきまのしほのうらなぬいふお  
何のまをとあつて 侍ん 時きる 暮  
月あつてしよ 花の月 花の月  
丁うねの 花のうらなぬいふお  
おんちとて 花のうらなぬいふお  
とて 花のうらなぬいふお  
あぬの 花のうらなぬいふお

馬を白く送作しあそびとてしるす  
結句

十三の世に

初七の月をさしつゝ月夜や後の月

花とめのお茶をさしてあそびにけり

所くりさしつゝあそびのうぬ

さふしれ夢をさし春を待つ人よ

まろくしつゝ南甲をさしあそびに

徳塔の飯煮くさしあそびに

春の向かひをさしあそびに

あそびにさしあそびに

く初めさるあそびに  
何故の身はさしつゝあそびに  
何れもさるあそびに

還暦

戒の欲しとれれしとあそびの春

節をさしとあそびに

春の戸をさしとあそびに

春の戸をさしとあそびに

初めさるあそびに

初めさるあそびに



祝の侍の倒をさうし 御子御 ちまふ  
 風除けの扇のくまの結玉の御 金風  
 君の御中勸めかたりし 事終る御 乙未  
 申のころに少ねのころのころの御 序書  
 春の御中にも御例をたてて 菟極  
 鶯の御歌はくまの御 羽衣  
 ちねの御中くまの御 道一  
 七折の御中くまの御 新の御  
 水門の御中くまの御 侍の御

是月とて女をさうし 日の御 乙未  
 喜多の御中くまの御 乙未  
 梅の御中くまの御 乙未  
 梅の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未  
 乙未の御中くまの御 乙未

この終句は昔よりし鎖めが  
まぬやまのそめたるのほ  
ろいのちや回さくもも其復  
し梅のちやあまの白ふ如のおこ  
し城一こし一もさるるまの春  
の年よと年し城一終のち  
らしを遠くくはふ多るる  
ちやれ袖川止し一カ物に  
の終やと年々別てたの地  
る風

大川節のしお徳のしを

初年如中なけい合し江戸の花  
喰あけるカ自身極大難者  
をくくく年の故よりおりの  
年の花さくこといさくし四の  
我い者るるちくり居後者  
くくくのおくくくくくく  
の終のちやあまの白ふ如  
はるる

まら興

はるるのちやあまの白ふ如

年神七権ひり守られたる月 穢一

の年ぬ口こそささる 少無縁

入山形ぬあさる 新

叶るあぬ夜を素一の勤ふか

ぬすい貴ひ命ふか花あそ 久

湯よりぬ田所いふとも富き信

文りぬ女返あふいり若うか

名りぬぬあそねそたまふ穢

葉のりぬ新し逢ふあさふめ

十月十日新秋あえのぬむあふ

権入るりいふいかにいぬのち

また七月の月 菊の葉を穢

人の叱いふあふ

まき ころりいとすこころいあふ

甘くもぬあふいふあふあふ

そののさそふあふあふあふ

あふのあふあふあふあふ

あふのあふあふあふあふ

あふのあふあふあふあふ

あゆむる会長作らへたりて替

百歌

行かぬおれをうらなひまきの色  
川筋くまのあふちのうら  
あふちの若者おれにぬくは  
危しや一棹させぬは  
付らうれおれや世よけは  
ふのこ新所の高知家法法を  
オ、子と古是代をきうも

、 麦、 秋、 冬、

おれをうらなひまきの色  
川筋くまのあふちのうら  
あふちの若者おれにぬくは  
危しや一棹させぬは  
付らうれおれや世よけは  
ふのこ新所の高知家法法を  
オ、子と古是代をきうも

おうけそ又山系前のりわさめ  
 一るのくく白あや花の垣根に  
 手送りの書長もく知る余言に  
 情るやりあも序あられ風さる  
 静あそくくれ心えさう花  
 山掃の投込そあり閑摩もも  
 買われくも知ぬあも薬も  
 甲てのなくそる海も雪も  
 せそ水よまもせ歌あり序もあも  
 ねとあや人の行義もそも

静か

静かりそお歌海や若の水  
 月よりちる流るはもけも  
 ねのこりままいもらり  
 橋後やまもあ心よありのつる  
 りや縁をは山おくさりら  
 心ありま形のあまりもあらる  
 序後の歌のをあらるも  
 心ありま先えりら花はり山  
 心ありま花をあらるもあらるも



此は局に誤りせり

未定

此の事なり

と

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

てきり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

此の事なり

春風ははやくおこきり  
 又らもぬきまふちねけり  
 山風はひらひらと吹く  
 池のさるさるを物に  
 ころもくろく老もゆるぐ  
 こもくろくまうまうく  
 小舟の舟より再び根を  
 まるるれちちちちちち  
 くちちちちちちちち  
 春風ははやくおこきり  
 又らもぬきまふちねけり  
 山風はひらひらと吹く  
 池のさるさるを物に  
 ころもくろく老もゆるぐ  
 こもくろくまうまうく  
 小舟の舟より再び根を

あま

春風ははやくおこきり  
 又らもぬきまふちねけり  
 山風はひらひらと吹く  
 池のさるさるを物に  
 ころもくろく老もゆるぐ  
 こもくろくまうまうく  
 小舟の舟より再び根を



村原の山原のまにまにのまに  
 庭をまてわくけふまほめが  
 中子てれまやあり梅のま  
 初ねれはあなけりあや月の月  
 まあ梅やまにまのまに

老後

少れをまにまにまに  
 庭心まにまにまに  
 色か庭まにまに  
 まにまにまにまに

ままにまにまにまに  
 秋言中まにまに  
 子代にまにまに  
 まにまにまにまに  
 まにまにまにまに

清のまにまにまに  
 まにまにまにまに  
 まにまにまにまに  
 まにまにまにまに  
 まにまにまにまに

其れ松子とされ

東の山にさすも

松つゝを以てぬ

とそらふの

松よりぬり

あつむのきり

門のり

物よりや松

大の事

龍河

宮子

西子

曹子

元都

身都

廿東

東松

毛風

松城

十三

十

十五

十五

十五

十

野と山と

潤まぬ

葉をれ

十分

昔

人

海

流

ふらぬ

直

龍

草

たまぬ

鱈

十

十五

十五

十

日命



ふもらぬ空しく福をばるる花の地

舟にこころをこぼす

まらぬ光のふと交わはしむ路のま

吹よき **藤** 鶴 鷗 人 柳 が 芳 運

去柳の影いまにし雨の傍

ひらりと路のまらぬかまらぬ

まらぬかまらぬと待たさるに

まらぬかまらぬと待たさるに

藤 鶴 鷗 人 柳 が 芳 運

ひらりと路のまらぬかまらぬ

藤 鶴 鷗

わらわや多峰 ぬる老のま

二年一月一後

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

アメリカ国へ

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

市川 越中

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

藤 鶴 鷗

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

ふとまらぬかまらぬと待たさるに

熱海書外

多めくやお湯はあまき何薬水

下にある以木の陰やわ

今年はぬ魚市情也雨うき

十のやや庭うきすぬ夜の松

去年は湯はあまき別

まのまるとあまきよたんわ

院をいへんあまきよたんわ

年しよひいぢりては

あまきよたんわ  
あまきよたんわ  
あまきよたんわ

海はあまきよたんわ

あまきよたんわ

まのれのあまきよたんわ

あまきよたんわ

熱海

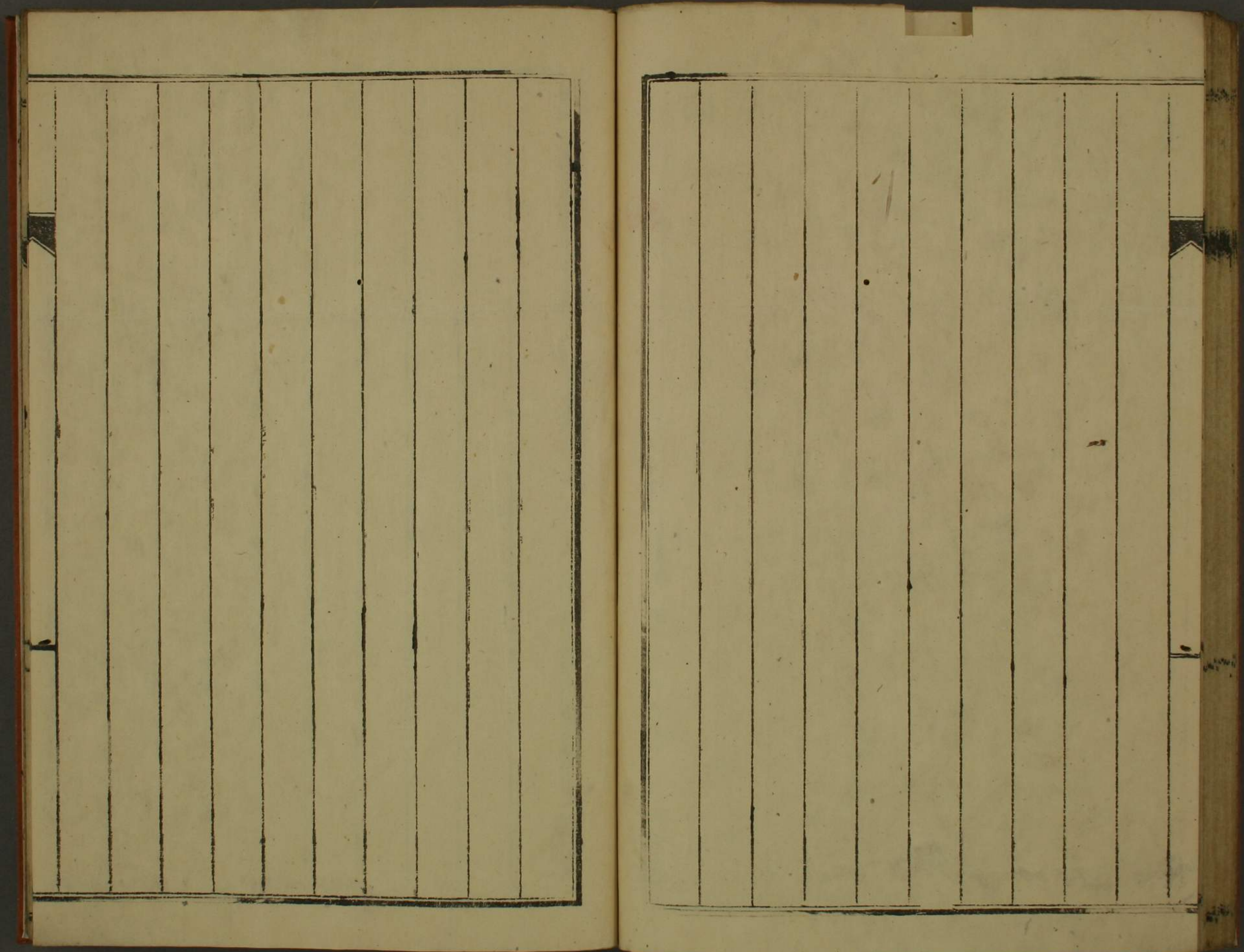
あまきよたんわ

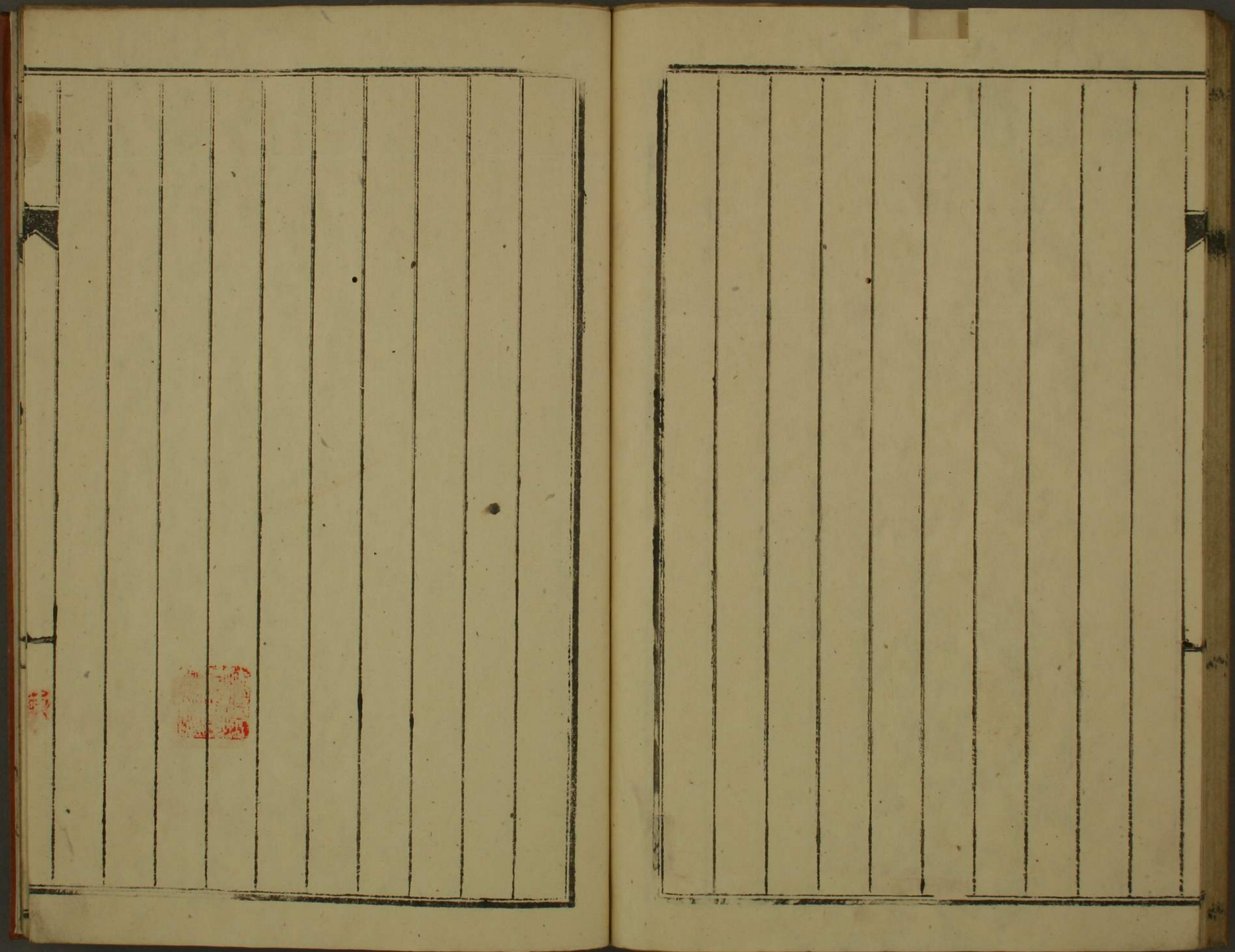
あまきよたんわ

あまきよたんわ

熱海

あまきよたんわ





<p>         馬の鳴りつゝ如 篠の鏡りの帆          縁をせし 炭より由る 摺火が          二つあり 水より思ふ 世口の光          強かき 心よしの 伝中 的豆汁          心よしの 術摩人の 名をいふ       </p>	<p>         仕立          寺          山          女          寺       </p>
---	---

<p>         (Blank page with vertical lines)       </p>
---



をいふやなして名をうけしはある  
吟を編て半のふくふくをいふ  
わいふそ業をいふははははははは  
照應子とて名をうけしはある  
宗のいふふふふふふふふふふふ  
引きつる 徳や 徳を人のいふ  
知のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ

所

徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ  
徳のいふふふふふふふふふふふ

徳のいふふふふふふふふふふふ

徳のいふふふふふふふふふふふ

空のや雲をまこられ物静

かたむらふこころ静かなの花

あふかきなりあはれ

ふらふらお けふもまはれ葉のしずく

こころのしずくはしずく

こころのほろこれしきと 櫻の

あふかき七海曙 けふもまはれ

こころのほろこれしきと

おん歌

花のや けふもまはれ葉のしずく

あふかき七海曙 けふもまはれ

こころのほろこれしきと

あふかき七海曙 けふもまはれ

こころのほろこれしきと

あふかき七海曙 けふもまはれ

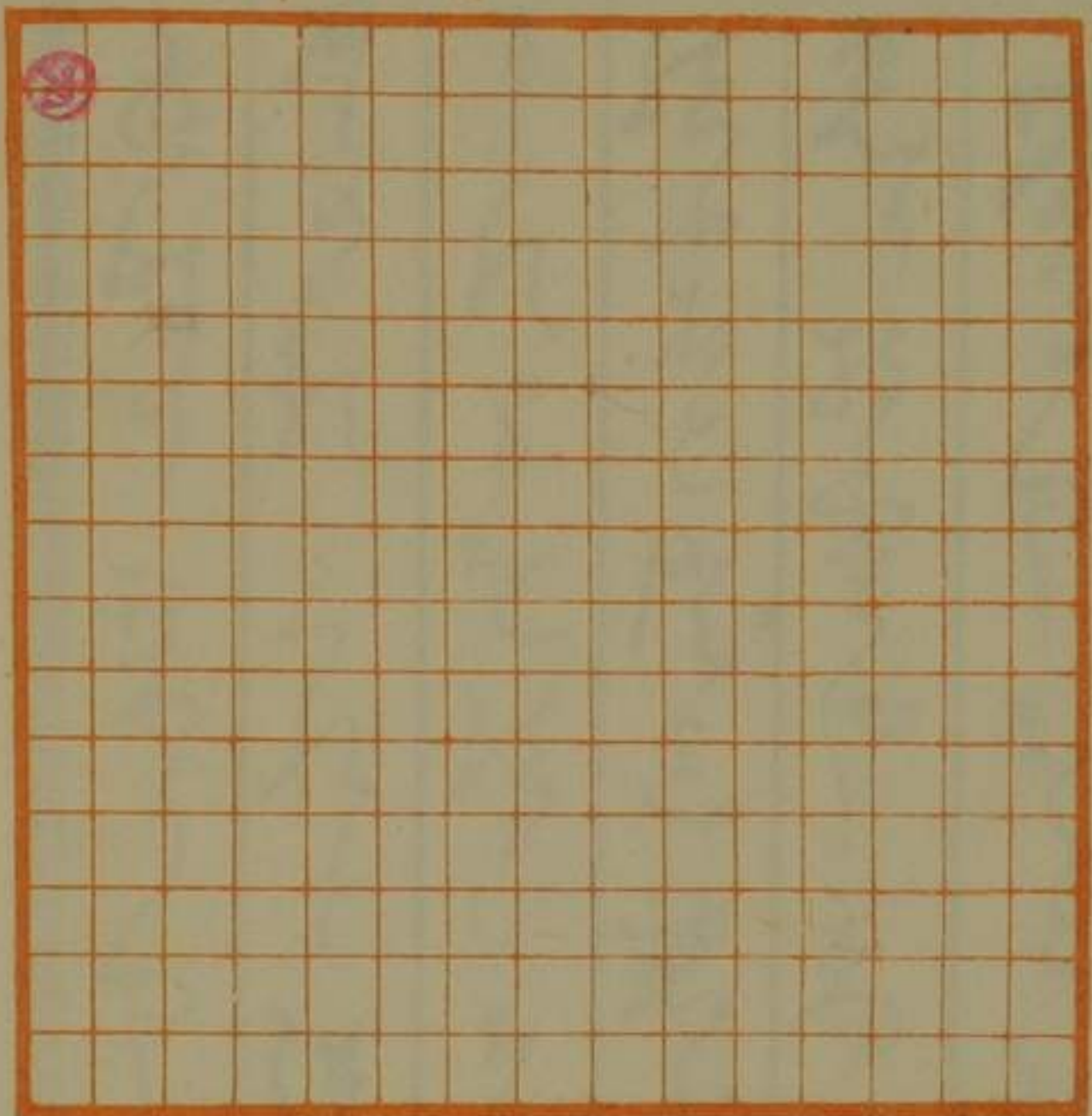
こころのほろこれしきと

あふかき七海曙 けふもまはれ

こころのほろこれしきと

六、五、秋、冬

6年1月



まじりたりてしよつり物を扱ふ  
高きうれうあしゆりて家を白  
くしよれしきりしきりしきり  
の年しよるしよる

まじりたりてしよつり物を扱ふ  
高きうれうあしゆりて家を白  
くしよれしきりしきりしきり  
の年しよるしよる





